

武庫川女子大学 武庫川女子大学短期大学部

第9号

FDニュース



● 目 次 ●

- | | |
|--|------------------------|
| [1] 本年度の活動方針 | [3] 学科FDの取り組み |
| [2] FD推進委員会の活動報告
FD学生座談会（平成24年度）の報告 | [4] シリーズ授業
[5] 編集後記 |

本年度の活動方針

FD推進委員長 渡邊 完児

平成24年に中央教育審議会が出した大学生の「主体性」の育成を重視した考えは、アクティブ・ラーニングやディープ・ラーニングを導入した課題解決型授業の展開を各大学に求めたものであり、本学でも「教育推進宣言」により“主体性・論理性・実行力”を培う教育の促進のために様々な取り組みが行われています。

平成24年度を振り返りますと、「より良い授業実施検討WG」のメンバーとしてアクティブ・ラーニングの展開を推進する problem-based learning (PBL) を導入した甲南大学や三重大学に足を運び、担当者との意見交換をするなど、他大学のFD活動の取り組みを学びました。その後の雑談で気がついたことは、本学においてもアクティブ・ラーニングとして多様なPBL形式の授業を展開されている先生方がたくさんおられることでした。“私の授業は〇〇形式の授業です”などとは言わない訳ですが、中央教育審議会が提言した「主体性」の育成に合致した内容で展開されている授業が意外と多いことを知ると、その展開方法を紹介して情報を共有することの必要性を感じました。

そこで、平成25年度のFD推進委員会の活動では、「授業公開」の継続とともに「主体性」を育成するアクティブ・ラーニングを実践されている授業を見学し、その特徴をまとめたものを教職員で共有して「より良い授業」づくりの参考にできればと考えています。また、FDに詳しい学外の講師を招いての勉強会や「より良い授業」について学生・教職員との意見交換も実施していく予定です。さらに今年度は学科FDを重視し、FDニュースを通じて各学科の取り組みなども紹介していきたいと考えています。

今年度もFD推進委員会へのご理解とご協力を宜しくお願い申し上げます。



平成25年度 FD推進委員会 小委員会活動内容

委員会	活動内容
授業改善・改革委員会	1) 前・後期授業公開開催運営、2) 「学生の自立を促す教育」のための調査及び研究プロジェクト企画実施委員会との勉強会、3) シラバスの作成についての検討会（PBLを導入した授業のシラバス、各学科の情報交換等）
学生・教職員FD委員会	各学科において、PBL、初期演習の新たな取り組み、アクティブ・ラーニング等を取り入れた取り組み状況と学生の反応をFD委員会のなかで交流しあう報告・検討会を行う。
FD講演委員会	学内外の講師による研究会やワークショップを開催し、実践的なFD事例を紹介する。これまでの小委員会活動で重ねてきた講義形式の授業を中心とした研究会に加え、今年度は演習・実習・ゼミなどを主な対象とし、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業の実践例やノウハウを教職員で広く共有する。例えば、教室の机の配置、教員の立ち位置、発問の仕方のように直接的に授業進行に関わるもののほか、図書館やラーニング・コモンズの活用など先進的な事例を紹介する。
FDニュース編集委員会	学科FD活動やFD推進委員会の活動状況などをニュースにまとめる。

FD 推進委員会の活動報告

FD 学生座談会（平成24年度）の報告

学生・教職員 FD 委員会主催のもと、平成25年1月21日（月）午後4時30分から日下記念マルチメディア館 MM-508教室において「留学生を囲んでの座談会」が行われました。

海外からの交換留学生

レイチェル プレアさん（オーストラリア マードック大学）
 ヘイリー ウォーカーさん（イギリス セントラル・ランカシャー大学）
 ホン ジュヨンさん（韓国 韓南大学）
 ワン ウェイラーさん（中国 山東大学）

本学からの交換留学生[※]

谷野 莉子さん（大学文学部英語文化学科、韓国 梨花女子大学）
 菅原柚布子さん（大学文学部英語文化学科、カナダ マウントロイヤル大学）
 服部 歩さん（大学文学部英語文化学科、アメリカ カリス・クラーク州立大学）
 大山紗友梨さん（大学文学部英語文化学科、オーストラリア マードック大学）

参加教職員[※]

大河原 量（学院長）
 今安 達也（副学長）
 濱谷 英次（共通教育部長）
 柴田 清継（日本語日本文学科長）
 櫻塚 正一（健康・スポーツ科学科長）
 竹島 信夫（英語文化）
 新井 彩（健康・スポーツ科学）
 小笠原一生（健康・スポーツ科学）
 松本 裕史（健康・スポーツ科学）
 目連 淳司（健康・スポーツ科学）
 渡邊 完児（FD 推進委員長、健康・スポーツ科学）

西山 明美（FD 推進副委員長、日本語日本文学）
 山根 明敏（FD 推進委員、英語文化）
 大岡 由佳（FD 推進委員、心理・社会福祉）
 田中新治郎（FD 推進委員、健康・スポーツ科学）
 肥後有紀子（FD 推進委員、情報メディア）
 田崎 祐生（FD 推進委員、建築）
 西川 淳一（FD 推進委員、薬学）
 菅 栄太郎（FD 推進委員、研究活性支援課長）
 宗光 猛（FD 推進委員、教務部次長）
 玉田 健二（FD 推進委員、教務課長）
 荒木 聡美（国際交流課長）

※所属・役職は平成25年1月21日現在のものです。

■ 司 会 大岡由佳・田中新治郎 FD 推進委員

スライド作成 肥後有紀子 FD 推進委員
 留学生紹介 荒木 聡美 国際交流課長

昨年、一昨年に引き続き、4回目のFD学生座談会を1月21日（月）に開催しました。今回は海外から本学に留学中の学生4名を交え、計8名の学生の皆さんと模造紙にメモができるテーブルを囲み、BGMが流れる和やかな雰囲気の世界カフェ形式で行われました。大河原学院長にもご参加いただき、20名を超える教職員と学生広報スタッフで満員となり、予定を1時間も超える熱心な座談会になりました。

大河原：グローバル時代にあって、本学の教育の在り方もぜひそれにふさわしいものにしていこうと改革を進めています。この件についてはFD推進委員会を設けて検討していただいています。海外から来られ、海外に行かれた皆さんに武庫川女子大学の教育についてぜひ忌憚のないところをお聞かせ願いたいと思います。

大岡：「学生の自立を促す授業とは」というテーマで進めていきます。それぞれの方から、留学体験を一言で言い表すことばをボードに書いてください。

大山：マードック大学（オーストラリア）です。私は「初（物）尽くし」です。





ヘイリー ウォーカーさん

服部：ルイス・クラーク州立大（アイダホ州）です。「向上心・探求心」を再確認しました。

谷野：梨花女子大学（韓国）で勉強しました。私は「宝物」です。

菅原：マウントロイヤル大学（カナダ）に行きました。「将来につながる夢」です。

ヘイリー：セントラル・ランカシャー大学（イギリス）から来ました。「いい経験」です。

レイチェル：マードック大学から来ました。10ヶ月が過ぎ、もうすぐ帰ります。

ワン：山東大学（中国）から来ました。「一期一会」です。

ホン：韓南大学（韓国）から来ました。「夢」です。

大岡：大学での学びについてキーワードをテーブルの模造紙にいくつか書き上げています。それを見ながら、それに書き込みながら話を進めていきます。

レイチェル：学生にはその授業で期待することを一週間毎、一時間毎に書かれたブックレットが渡され、読まなければならない本や、評価の仕方が詳しくわかります。これに従って学生の責任が問われます。評価で分からないことは先生に聞かないといけないとか、授業中ははっきりと自分の意見を言ったり、みんなの意見を聞いたりすることが求められます。

ヘイリー：私の大学でもそうです。推薦図書なんかも書かれています。これに従って学生に自分自身の時間を管理することが求められています。一人でできないことは、レポートなどのヘルプをしてくれる人員（ワイザー）が用意されています。



菅原：カナダもシラバスが充実しています。評価項目も細かくパーセンテージが書かれていて、それをクリアするのは自己管理に属しています。ライティングを助けてくれる人が図書館に配属されています。学生が学生に教える家庭教師も大学内にありました。

谷野：梨花女子大学では出席とテストが厳しく課せられていました。課題の量は比べものにならないぐらい沢山ありました。最後は、グループワークやプレゼンテーションが必ず課されています。

服部：ルイス・クラーク大学もライティングセンターがあって学生が働いていました。

大山：マードック大学の授業にはレクチャーとチュートリアルと二つありました。みんなはチュートリアルに向けて本を読んだり、講演を聴きに行ったりしてすごく準備をしていて、自分をそこでアピールしていました。



ホン ジュヨンさん

ホン：韓国では図書室や自習室が24時間あいています。学期は中間と期末に2分割されているので途中で自分が学んでいることを自分でまとめる機会になっています。

ワン：中国ではプレゼンテーションは少なく、最後の試験を重視しています。弁論会が多くあります。日本の弁論会にも出ましたが、一方的なスピーチでした。意見を言い合うことが重要だと思います。

大岡：ご参観の皆さんも聞いていて大切だと思ったことなどをポストイットに一言書きいただきご発言ください。

大河原：みなさんは、自分が将来なりたいという夢や仕事を成長段階のどこで形成されましたか？

レイチェル：私はもうすぐ30才になりますが、自分がしたいなと思ったときに大学に行って勉



レイチェル プレアさん



ワン ウェイラーさん



大山紗友梨さん

強をしました。高校を卒業したときには何がやりたいか分かりませんでした。何のプレッシャーも感じませんでした。

ヘイリー：高校が終わり大学に行くまでにカレッジの2年間があって、そこでいろんな経験をして将来を見つめてから大学に行きます。何歳でなにをしなければいけないという縛りはありません。やろうという気さえあれば何歳でも大学に入学します。

松本：初期演習の最後の授業が先週ありました。最後に、「今どんなことをやりたいか」を発表してもらいましたが約半数の学生が「今探しているところです」と言いました。意外でショックでした。



谷野 莉子さん

濱谷：われわれ教師が求められているのは、ファシリテーターの役割だろうと思います。私も20年前、初期演習でどう引っ張っていけばいいか壁にぶつかったことがありました。そこで、日頃自分が好きと思っていることを自由に書かせる、語らせることを仕掛けたら、学び方が深まり広がったという経験をしました。その時、われわれがどのように学生に刺激を与えるかが一番のポイントだと教えられました。

目連：私たちは環境作りをしていかなければと思いました。例えば、意欲ある学習を支える奨学金制度なんかも大切ですね。

今安：学生の自立を促す授業というテーマにとって、目標とか夢を持つことが大切だと思いました。貴重な会を設定して頂きありがとうございました。



服部 歩さん



菅原袖布子さん



座談会は、「自立を促す教育とは？」が出発点でした。自立した女性の育成の基本は、学びにおける自立であることがあらためて確認されたと思います。そしてそれはただ学生の自覚に訴えるだけでなく、それを促す働きかけや学習環境が鍵を握っていることも明らかになりました。授業の改善、学習を呼び起こすシラバスへの改善、学生のレポート作成を支援するライティングセンターなどの制度や施設・人材の整備など多くの課題に気づかされました。

最後に、誌面の都合で取り上げることのできなかった多くの先生方の発言は、本学のFD活動を勇気づける貴重なものばかりでした。末尾ながら参加者全員に感謝申し上げます。

(FD 推進委員 田中新治郎)

2013年度 FD 推進委員会メンバー一覧

	役職	所属	氏名		役職	所属	氏名
1	委員長	健康	渡邊 完児	11	委員	建築	田崎 祐生
2	副委員長	日文	西山 明美	12	委員	音楽	松本佳久子
3	委員	日文	管 宗次	13	委員	薬学	西川 淳一
4	委員	英文	山根 明敏	14	委員	共通	木村麻衣子
5	委員	教育	和田垣 究	15	委員	教務部	齊藤 文夫
6	委員	心福	中尾賀要子	16	委員	研究活性支援課	菅 栄太郎
7	委員	健康	田中新治郎	17	委員	教務部	宗光 猛
8	委員	環境	北村 薫子	18	委員	教務課	玉田 健二
9	委員	食物	澤田小百合	19	委員	指導課	山田 雅子
10	委員	情報	肥後有紀子				

学科 FD の取り組み

建築学科 教授 田崎 祐生

2006年の開設以来、建築学科ではユネスコ UNESCO と国際建築家連合 UIA が採択した「建築教育憲章」に適応した世界水準の建築家教育を実践しています。この「建築教育憲章」で求められる最低5年間の教育期間、少人数制で対話型設計演習の重視といった方針に適応すべく、大学院修士課程と併せた6年一貫のスタジオ型教育を推し進め、昨年、2012年には日本ではじめて、UNESCO-UIA の認定機関である日本技術者教育認定機構 JABEE の認定を受け、「建築教育憲章」に対応しうる学士修士課程の一貫教育であることが世界的に認められました。



ここでは、「UNESCO-UIA 建築教育憲章」が求める「スタジオ型教育」の代表的科目として、学部1年生から修士2年生まで全学年で、一貫して取り組んでいる「建築設計演習」について、FDの視点から紹介してみたいと思います。

「UNESCO-UIA 建築教育憲章」では、授業の大半が建築設計などの演習であること、そうした演習を担当する教員は設計経験のある建築家であり、また教員1人に対して学生15人程度という少人数教育が求められています。建築学科では、経験豊富な非常勤講師も含めて、これらの基準を満たした体制づくりに努め、こうした演習を支える環境として専用のスタジオの確保を必須として整備してきました。建築設計演習では、時間割上の授業だけでは作業時間は十分ではありません。多くの学生が、放課後など演習時間以外にも、各学年のスタジオで、自分専用のデスクに向かって制作に励みますが、教員も随時、スタジオを訪れて、個別指導を行っています。さらに完成した課題はすべて各学年のスタジオ周辺に展示され、教員だけでなく、外部から訪れる関係者や異なる学年の学生も常時、見ることができ、学生と教員あるいは学生同士の幅広い交流の場ともなっています。また JABEE 審査の重要なエビデンスともなる毎回の授業報告書や採点資料などを介して、教員間のデータの共有化も図られ、建築学科全体でのオープンな交流に努めています。

近年、教育評価の指針としても、アウトカムズ重視の傾向が顕著で、建築学科においても、完成し提出された成果物のチェックだけでなく、その作品を学生全員が2日間に渡って発表する講評会での教員や外部専門家の評価、さらには学生同士の講評内容も含めて採点されますが、演習途中での中間講評会での提出物は発表内容、授業中のスケッチやレポートなど、また学生同士のディスカッションの記録なども採点対象として総合的に判定されます。それぞれの課題を取り巻くさまざまな問題、建築的な問題だけでなく、社会的、歴史的、文化的な諸問題についても学生各自が自主的に調査研究し、その成果を設計にも反映させることはまさに PBL の典型であろうし、それらは毎週土曜日に実施される学外見学会や各種講演会などのフィールドワークによってもさらに展開していくことが期待されています。

このように演習のそれぞれの過程での成果を教員と学生、学生相互の双方向の評価や意見交換を通して、演習自身にフィードバックできることは、武庫川女子大学全体で取り組んでいる FD の方向性に合致するものです。こうしたスタジオ型の建築設計演習は6年一貫の流れの中ですべての課題が段階的にはっきりと位置づけられるとともに、専門課程の講義科目との連携を通して、各科目の学習・教育到達目標や建築学科が育成しようとする「真・善・美」を総合できる自立した建築家像についても、学生・教員の一様な理解を促す主要な契機となりうるもので、これらを通して建築学科全体が今後とも継続的な FD に自主的に関わっていくことが必要であると考えています。

シリーズ 授業

「大学らしい講義」

日本語日本文学科 教授 管 宗次
日本語文化学科

FD ニュースの「シリーズ授業」の原稿執筆を拝命した。バックナンバーに、目通して、あらためて皆はうまいなあと思う。舞台の名優のように生きた個性がきらきらしており、自負なくしてはありえないのが大学の講義であると思えた。人気テレビドラマ「ガリレオ」でイケメン福山雅治演じる帝都大学工学部物理学科の准教授湯川学先生の講義は、かなりオーソドックスなスタイルの講義にみえる。ドラマとは言え、大学の講義というもの、あらまほしきスタイルというものが多くの視聴者共通イメージにあるのであろう。悔しいが、福山雅治には及ばない。



ここでは、私の講義の話をする。「シリーズ授業」の原稿依頼があったのでと受講生に述べた上で、感想を忌憚無く書いてもらってみた。遠慮が無い。「話が脱線するにはおもしろいが、もっときちんと授業してほしい」「試験に何がでるのかわからない。試験に出るところを教えてください」「いつも結論がわからない」などなどが、はっきり不満な感想が強く意志表示されている。反省している。ここでは、反省と悩みを書きたい。実は、悩んでいることを、今年から正直に学生たちに告白しながら講義している。

演習はゼミナールで、私を選んでもくれた学生諸君によって構成されていることの幸せをしみじみ味わっている。同学の後学者と集うという、大変クラシカルな喜びに毎週の講義が本当に幸せである。私が障害者であることを気遣ってくれているのも演習である。さすが、女子大学だなあ、「気はやさしくて力持ち」と唱歌の一節が浮かぶ。演習では変体仮名を原典資料（和本の歌集）から、はじめる。また、古文書では大河ドラマ「八重の桜」でイケメン玉山鉄二が演じる山川大蔵の自筆書簡を用いている。みな、私の所蔵品で、未発表のものである。そのことに、受講学生と私は地ならしも出来ていないフィールドにともに立ち並んで歩んでいるようなもどかしさと不確かさを楽しんでいる。



湯川学准教授のように「実に興味深い」「さっぱりわからない」と聞こえるか、聞こえないかぐらいのつぶやきをもらすよろこび。説明が足りないのだと、悩みながら反省している。しかし、楽しい。FDは真剣に私に講義のことを考えさせてくれるようになった。大学らしい講義を受講生とともに展開したい。

演習ゼミナール生がこんな話もしてくれた。「水曜日3時間目、先生の演習はスッピンでは、行けません。でも、みんなが自分で念入りにファッションチェックしてくる演習では眠る子がいませんよ、先生。気付いてましたか？」そばにいたゼミ生たちは、みな大きく頷いた。ファッションチェックなどしたことのない、涙腺の弱い私は少し涙眼になった。

編集後記

先日、FDの勉強会にて『学生の自立を促す教育』—教育評価の観点から—と、題して京都大学 高等教育センターの大塚雄作先生に有意なお話を聞かせて頂いた。自分の授業も顧みながら考えることのできる場であった。拝聴しつつ、本学の共通教育で「ヒューマンスキル入門」という科目名でご担当されている谷口節子先生の話を思い出した。

彼女は、学生が社会にソフトランディングし、社会で活躍できる自立した女性になってほしい一心で、学生の向学心に火をつけている。授業中には、学生が積極的に発表できるよう仕向け、毎回授業終了後には、B5の用紙に授業で学んだことや質問を書かせ（毎回真っ黒になるほど小さな字で書き込んでいるという）それを毎回の授業の際、パワーポイントで返すという、熱心な授業を展開している。

つまり、教師自身がアクティブに授業に臨めば、学生も意欲的に授業に取り組み、自立した女性に育っていくのではないだろうか。

（編集委員 AN）



【FD ニュース編集委員会】 木村麻衣子、西山明美、管 宗次、玉田健二